

「雲夢龍崗秦簡」についての実態考察

馬 彪

一、はじめに

日に現場調査研究を行なった。

二、現地・実物・本人への調査三段階

最近の二三十年來、中国内陸の「經濟改革」の急速進展とともに、建築工事現場から秦漢時代(BC330~AD30)の簡牘文字が大量に出土し、「社会科学の先端分野」と呼ばれている簡牘史学(一般には「簡牘学」といい、さらに広く「簡帛学」とも言われている)も盛んである。「雲夢龍崗秦簡」(以下、龍崗秦簡と略称する)はその簡牘文字資料の中の重要な一つとして、一九八九年末、中国湖北省文物考古研究所・雲夢縣博物館が雲夢城南東郊外(北緯31度、東經113度45分)の龍崗で発掘した古墓において発見されたものである。

私はすでに二〇〇二年夏から「龍崗秦簡」の注釈を訂正する目的で、写真版に基づきこれまでに発表された解釈の誤りを一ずつ訂正する作業を始めている。しかし、出土木簡の解釈について、現場に実物を見に行くことや関連する研究者たちとの討論がないと十分に正確な解釈を与えることは難しいのは、言うまでもないことである。ゆえに、今回山口大学日中学術交流基金の支援によって、「龍崗秦簡」の現地調査に基づき再検討という課題をもって、二〇〇五年二月一日〜十九

ほかの秦簡と比べると、「龍崗秦簡」の保存状態はかなり悪く、断片が多いので、その原因を知りたいという目的を抱いて中国湖北省の雲夢縣の龍崗にある現場まで踏査しに行った。一九八九年当時、現場にいつて自ら発掘した、現役雲夢縣博物館館長の楊文清氏を訪問したのである。彼と同じ博物館の張宏奎・陶漢橋及び雲夢縣文化局の汪專雲三氏とともに討論会を行なった(写真1)。

龍崗秦簡の実物はもともと湖北省考古研究所で保存されたが、その研究所が湖北省博物館と合併してから、博物館に移ったのである。実物は全部で十箱の竹簡と一枚の木牘である。それらの全部を余すところなく見ることができたが、少し残念なことは一九八九年に秦簡が出土したM6墓の発掘担当者の一人、梁祝氏が当省博物館に所属しているのに、私がそこを訪問した日には、外出されており不在であったことである。



写真1 湖北省雲夢県博物館への訪問

発掘現場の当事者や本簡を整理した研究者への訪問も今回行った調査には不可欠の事である。その際、私はこれまでもついていた疑問や不明な点を質問する事ができ、色々と教えて頂いたのである。また、中国における現在の簡牘に関する最新発見や研究状態などの情報収集もできた。その三段階によって得られた成

果は以下の通りである。

三、出土当時の実態の現地考察

「龍崗秦簡」の研究に着手してから、何年間も抱いていた疑問の一つは、二百枚余りにもなる本簡の地下保存状態がよくないと発掘報告されたことは分かるが、なぜ現物の写真と発掘したときの竹簡の配置図にはつきりみられるように、全ての簡の一部は截然と切断されているのか理解し難いことである(図1)。今回の実情調査ではこの疑問に基づいて、当時の発掘状態に対して発掘担当者の一人の楊文清氏に以下のようにインタビューをした。

馬：楊館長さんは一九八九年に龍崗秦漢墓地を発掘した担当者の一

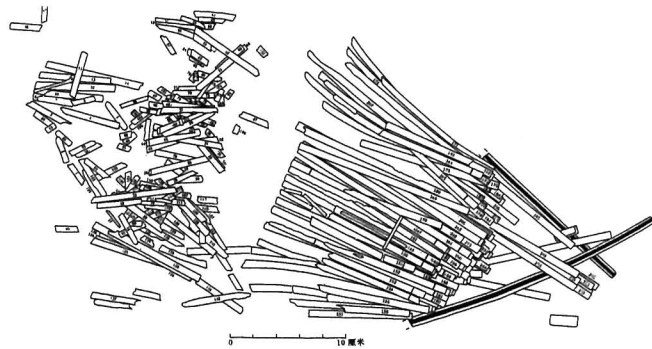


図1 M6棺内竹簡の配置図
(劉信芳・梁祝『雲夢龍崗秦簡』(科学出版社一九九七年七月))

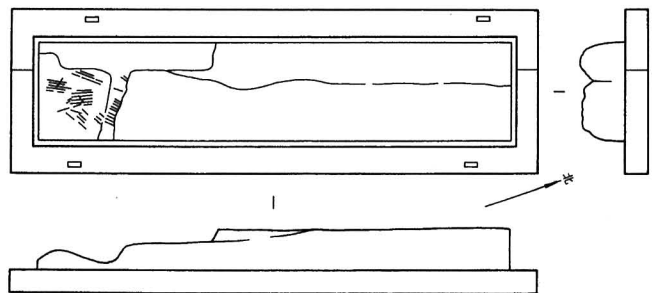


図2 M6棺内に沈積していた土砂の断面図
(出典は同図1)

人ですね。その当時の龍崗秦簡の発見についてご紹介していただきました。いのですが。

楊：当時は龍崗の十五ヶ所の秦漢時代の墓地を見つけて、龍崗秦簡が発見されたM6墓は私が担当したものではなく、元の(雲夢県博物館)館長の劉潤清さん(今年に逝去された)と湖北省博物館の梁祝さんの二人が担当したのです。竹簡を掘り出した日は私がちょうどその現場にもいたのです。ですから、その発掘の事情をいまでもはつきり覚えていきます。

あの日はもう夕方になっていました。M6の棺の底部では三分の一

ほどの黒い土砂を整理する作業が進んでいたのです(図2)。初めのほうは私が整理していましたよ。ちょうど竹簡が出る前に、劉さんは私の発掘進度が遅いと思ったようで、交代してくれました。彼がスコップで、一回目を掘っても何もなかったが、二回目を掘ると、なにかものが出てきたそうです。少し水で洗って、墨書が出てきて、竹簡だと分かったのです。

馬：そのとき楊さんは現場にいて、竹簡を見ましたね。

楊：見ましたよ。当時、私と梁祝さんは現場にいたのです。竹簡が発見された後、すでに掘り出した土砂をもとの所に戻し、封じました。すぐに公安局の人間が銃を持って、現場を警備して、何人かの民工を呼んで、当夜棺を出して博物館の大成殿(写真2)まで運んできたのです。そのとき一緒に棺を整理したものは十何人もいましたよ。

馬：土砂と言うことは、どろどろしていましたか。

楊：はい。とても水が多くて、とてもどろどろしていました。

馬(劉国勝氏へ)：現場にいた梁祝さんは後ほど自分の本に今教えていただいた事情を書いていないですね。

劉国勝：書いていません。

竹簡の置き場所が棺内であるのは、秦漢時期における墓葬の特徴です。雲夢秦簡も殆どそうです。いつも死体のある所に置いてあり、龍崗秦簡は死体の足元にあるのです。

以上、楊氏の話から、これまでに知らなかった龍崗秦簡の発掘状態について分かったことで、少なくとも以下の二点に注目すべきであろう。

第一に、本簡の出土地現場は、水(地下水?)が多い地勢で、どろどろしていることである。ゆえに、竹簡の保存状態はかなり悪いことが分かった。

第二に、竹簡を発見したのは、夕方から深夜までの時点であり、あわてていて何かミスを犯したのではないかと考えられる。

このような事実により、これら本簡の研究に持っていたいくつもの疑問が解けただけではなく、今後の研究に大事な一要件は本簡の復元作業であろうと考えられることとなった。

四、M6の死体をめぐる問題

龍崗秦墓M6の死体を巡って、その生前の身分に対しいくつかの推測がある。いくつかの推測のなかに、黄盛璋氏の刑刑説もあり、彼は「死者は下肢がないので、刖刑を受けた刑徒だろう。「刖者使守囿」によって、雲夢禁苑に関する法律文書を管理させた。墓主は元の雲夢禁苑を管理する官吏であったが、刖刑に処せられた後、刑をもって役に



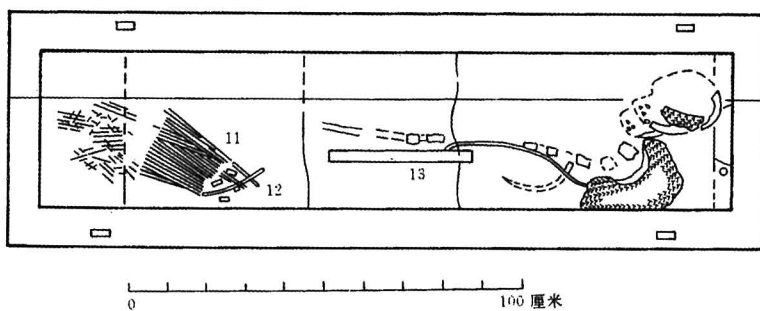
写真2 龍崗秦大成殿内の博物館最初の整理場所

服した。」と言った(注一)。

この説に対して劉国勝氏は以下のように反論した。「該当墓を発掘したとき「下肢の骨が見られない」という報告によって、墓主の辟死が別刑に処せられたという判断はしにくいのである。理由は、第一に、この(発掘)資料は曖昧ではつきり書いていないが、全ての下肢骨が見られなかったそうである。しかし、古代の別刑は下肢の全部を切るわけではないであろう。(以下省略)」(注二)

二人の討論によって、発掘したときには死体がどのくらい残っているかが問題の焦点となっていたのである。ゆえに、これも今回の現地調査の一つの目的となった。

楊さんに確認したところ、M6墓の死体は下半身も上半身も骨が殆ど残されていない(図3)のは、事実である。彼は繰り返し「死体の保存状態はとても悪い」と強調した。つまり、人骨によって墓地主人の身分を判断することはできそうもないと考えざるをえない。



図版3 M6棺内にわずかに残っている人骨(出典は同図1)



写真3 発掘現場(右側は龍崗秦簡の発見者楊文清氏)

五、両雲夢秦簡の発見地の位置

研究対象となっている本簡は、もう一つの「雲夢睡虎地秦簡」の発見場所と同じく今の雲夢県の城外であり、両秦簡の発掘場所の間には何らかの関連性がないかという疑問をもち、龍崗秦簡の現場の発掘者である楊文清氏の案内に従い、両秦簡の発掘現場踏査を行った。

現地踏査では、龍崗秦簡の現場は現在刑務所になっており、秦簡が発見されたM6の墓は現刑務所の受付の場所であると教えられた(写真3)。刑務所であるから、龍崗秦漢墓地を示す看板がない。

雲夢県刑務所から睡虎地秦簡の発掘地へ行く途中、私の要求に応じて、楊さんは雲夢県「楚王城」遺跡まで案内してくれ、保存状態の良

い北垣(戦国時代に建てられた)に行つて、地面から二〜四mの垣に登った(写真4)。(注三)そのとき、秦時代にも使われていたこの城の南城外にある龍崗秦墓地と、西城外に位置する睡虎地秦墓地との間に一体どのようなつながりがあったのであろうかと突然思い



写真4 雲夢県「楚王城」の北垣

として念頭においている。

睡虎地秦簡の現場はコンクリート工場になっている。現場から200-300 m離れている交差点のところに一つのぼろぼろの看板が立っており、わずかに「湖北省重点文×保×××睡虎地×墓×」(写真5)という字だけ見受けられる。その看板のすぐ北には列車の積荷場があり、ここに入ると、「漢康鉄道」(武漢-安康)の路線の西側は「雲夢県水泥廠」(コンクリート工場)の裏側であって、楊さんに「あそこが睡虎地秦墓の発掘現場です」と教えていただいた(写真6)。

また、刑務所と積荷場とも立ち入り禁止であるのに、楊文清氏の交渉によって私はその現場に入り写真を撮った。現場調査には現場の人間の協力がなければならぬ事情を痛感したのである。

もう一つの情報として、睡虎地秦簡が発見された直接の理由となっ

あぐねてしまった。仮説として、

この城はもしかしたら当時の「雲夢官」の役所の所在地ではないかと考えた。ゆえに、調査した後、自ら「秦時代の雲夢城と両秦簡発見地の地位図」(『考古』一九九一年第一期に載せる「湖北雲夢県「楚王城」平面図」を基に)(図4)を作って、さらに調査を進める新しい出発点

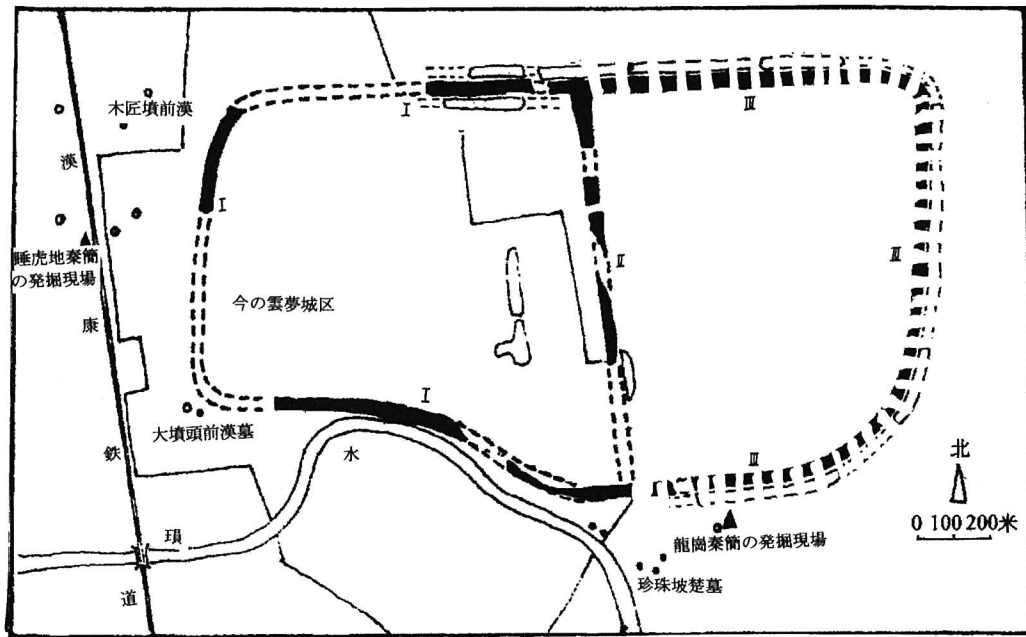


図4 秦時代の雲夢「楚王城」と両秦簡発見地の地位図
 (『考古』一九九一年第一期に載せる「湖北雲夢県「楚王城」平面図」を基に)
 I 戦国・秦・漢代に続けて使っている城壁
 II 秦代の新築した城壁と推測される
 I+II 秦代の雲夢城(「雲夢官」の役所の所在地ではないか)
 III 秦代から廃棄された戦国の城壁



写真5 「湖北省重点文物保护单位睡虎地古墓群」の看板



写真6 睡虎地秦墓の発掘現場を指し示しているところ



写真7 湖北省博物館に保存している本簡の実物を観ながら、該本簡の整理者の一人、劉国勝氏との討論



写真8 武汉大学楚地出土文献研究中心の研究者との座談会

た「漢康鉄道」は、今年にも複線を開通するために、大規模な工事を行う予定であるという。そのときまた何か発見される可能性もあるであろう。

六、実物に関する討論の概要

湖北省博物館で保存している龍崗秦簡の実物の全てを自ら観せて頂いたことは、今回の調査で一番価値があることでもある。『龍崗秦簡』という本を編集するために、実物を整理した人物の一人、武漢大学助教授の劉国勝氏に案内して頂き、本簡の実物を一枚ずつ見ながら彼と直接討論を行なった(写真7)。また、実物を観たあと劉国勝氏の所属している武漢大学歴史学部楚地出土文字研究センターの研究者達の陳偉(センター長)・李天弘(本簡の整理者)二教授とも討論会を行

なった(写真8)。その結果、実物は写真版とかなり違う感じがあるだけではなく、さらにその原因も多少分かった。例えば、本簡の実物の面は凹凸があつても字が写真よりきれいに見え、臨場感がある。また、本簡を整理する過程で脱水と撮影の手順が逆になってしまったことも分かった。また、今その竹簡の表にはかびが生えているような状態であり、大丈夫なのかと注意を促したのである。

七、本簡に関する文字専門家との討論

現場調査と実物を拝見した上で、北京・上海の研究機関と大学の研究者達を、具体的な質問をすること・最新簡牘の発見と研究情報を収集するという二つの目的で訪問した。

中国文物研究所出土文献与文物考古研究中心の胡平生氏は、

現在中国の秦漢簡牘研究の第一人者ともいえ、「龍崗秦簡」の著者でもある。私は彼が今没頭している十巻本の『長沙走馬樓三国呉簡』を出版するための研究室（写真9）にお邪魔させていただいた。

胡氏には、私の「池魚」「両雲夢」「弩道」などのような細かい質問に丁寧な答えていただいた。彼の話しをまとめると、つまり、私の「池魚」を「池鑿」と解釈しているのは強引な感じがなかつたという質問に対して彼は、実は台湾の学者の一人もこの解釈は少し紆余曲折しているのではないかといわれたことがある、といっている。また、私の周囲五百里の「雲夢」澤は全て禁苑であると考えたと、広すぎるのではないかという質問に対しては、春秋・戦国時代の地理概念は後ほどの地域概念とは違う、と答えた。加えて、『漢書』地理志の「両雲夢」には、唐宋以来の学者にはそれが中央政府から地方へ派遣された雲夢澤を管理する水官であるという定論があつて、ここではそれを禁苑官と認定すれば、歴代の説と食い違うのではないかという質問に、胡氏は答えなかつた。また、「弩道」は一体如何なるものであろうという質問に胡氏は、それはやはり白建鋼氏の論文にいう弩兵が使っている道路である



写真9 北京文物研究所の胡平先生にお願いしたお邪魔の研究室

と考えられると答えた。また、この龍崗秦簡によって秦時代における禁苑の図面を作ることができるかどうかということの検討について、胡氏は「実はやってみようと考えたこともあるが、諦めた。理由は史料が少なく難しいからである。もし馬さんがやる気であれば、是非実施してください」と励まされた。二人の討論は必ずしも一致するわけではないが、私としては、胡氏のような簡牘学研究の大先輩のお話を聞かせていただき、まさに「聴君一席話、勝読十年書」（君に一席の話を聴くは、十年の書を読むに勝る）のように感じたのである。

また、北京師範大学の文字専門家の方と華東師範大学の歴史学者、牟登松氏の両教授への訪問においても、ご指導やご助言を与えていただいた。現在の中国の秦漢簡牘出土の最新情報と研究現状をよく把握でき、今後日本における簡牘研究をどのようにより速く発達させるか、また山口市日中學術基金の支援の必要性も感じた。

注一 「雲夢龍崗六号秦墓木牘与告地策」（『中国文物報』一九九六年七月十四日）

注二 「雲夢龍崗簡牘考釈補正及其相關問題的探討」（『江漢考古』一九九七年第一期）

注三 雲夢県「楚王城」遺跡は、外郭城は戦国、中垣は秦に建てられたと推測されている。また、東外郭城は秦時代から廃棄されたと判明したのである。（『考古』一九九二年第一期を参照）

【付録】 龍崗秦簡関連論文・書籍目録：

社會科學版、一九九七年第四期)

湖北省文物考古研究所、孝感地区博物館、雲夢縣博物館「雲夢龍崗秦

趙平安 「雲夢龍崗秦簡積文注釋訂補」(『江漢考古』一九九九年第三

漢墓地第一次發掘簡報」(『江漢考古』一九九〇年第三期)

劉 釗 「讀『龍崗秦簡』札記」(簡帛研究網站ホームページhttp://w

劉信芳・梁祝 「雲夢龍崗秦簡綜述」(『江漢考古』一九九〇年第三期)

www.jianbo.org/Wssf/huzhao2.htm' 二〇〇一年九月四日、

胡平生 「雲夢龍崗秦簡「禁苑律」中的「栗」(塙)字及相關制度」

「簡帛語言文字研究」第一期、二〇〇二年)

(『江漢考古』一九九一年第二期) 『胡平生簡牘文物論集』(蘭
臺出版社、二〇〇〇) 所収。

劉金華 「雲夢龍崗秦簡」所見之秦代苑政(『文博』二〇〇二年第一期)
趙平安 「雲夢龍崗秦簡釋文注釋訂補」(『簡牘學研究』第三期、二〇〇二年)

湖北省文物考古研究所、孝感地区博物館、雲夢縣博物館 「雲夢龍崗

馬 彪 「龍崗秦簡一の解釈及びその性格について」(『早稲田大学

六号秦墓及出土簡牘」(『考古學集刊』第八集、科學出版社、

長江流域文化研究所年報』第二号、二〇〇三年十一月)

黃盛璋 「雲夢龍崗六号秦墓木牘与告地策」(『中國文物報』一九九六

楊懷源 「龍崗秦簡」句讀献疑」(簡帛研究網站ホームページhttp://

年七月十四日)

www.jianbo.org/ADMIN3/HTML/yanghuayuan03.htm' 二〇〇四年九月二十日)

胡平生 「雲夢龍崗六号秦墓主考」(『文物』一九九六年、第八期)

「胡平生簡牘文物論集」(蘭臺出版社、二〇〇〇) 所収。

趙平安 「雲夢龍崗秦簡釋文注釋訂補—附論「書同文」的歷史作用」

李學勤 「雲夢龍崗木牘試釋」(『簡牘學研究』第一輯、甘肅人民出版社、一九九六年十一月)

(『簡帛研究彙刊』第一期、二〇〇三年)

胡平生 「雲夢龍崗秦簡考校正」(『簡牘學研究』第一輯、甘肅人民

出版社、一九九六年十一月)

劉國勝 「雲夢龍崗簡牘考校補正及其相關問題的探討」(『江漢考古』

一九九七年第一期)

黃愛梅 「睡虎地秦簡與龍崗秦簡的比較」(『華東師範大學學報』哲學